

第二高等学校長 中川 元

——埋れたままの海洋学者——

明治三十三(一九〇〇)年から明治四十四(一九一)年まで、第二高等学校長の職にあった中川元(なかがわ・はじめ)は、明治二十(一八八七)年四月の開校と同時に着任した吉村寅太郎(前・文部省参事官)から数えて、四人目の学校長であった。前任校は、第五高等学校であり、発令は四月十三日であったけれども、第五高等学校教職員、生徒が、揭示を介してそのことを正式に知ったのは、四月十六日であったとされている。^①

中川元に対する転任の発令は、生徒の眼からみると意外に思えた由であるけれども、当人にとって、新しい任地である仙台は、ゆくに甲斐ある場であつたらう。第二高等学校の創設が決定し、校舎敷地選定のため、文部大臣森有禮が訪仙しており、それに随行した文部大臣秘書官は、中川元なのである。また、第二地方担当の文部省視学官であつた当時は、公務でいく度も仙台に足を運んでいた。

それに加えて、恐らく視学官当時に知己を得た早川智寛(後の仙台市長)の姪―戸籍上は養女を後妻に迎えていたのだから、学校改革が至上の課題であり、しかも未知の地でもあつた金沢(第四高等学校の場合)や熊本(第五高等学校の場合)への赴任に比べたなら、心中の動揺は、はるかに少なかったかと思われる。

とはいえ、中川元に対する第二高等学校長任命には、いまは前校長と

なつた菊地謙二郎が「水戸ッポ」の硬骨ぶりが裏目にて、文部省専門学務局長としての上田萬年と衝突し、休職を命じられた後始末の要素が多分に含まれていたのだから、気安く赴任というわけにもゆかなかつたらう。ちなみに、第三代校長としての菊地謙二郎の在任期間は、僅か一年九か月であつた。

1

第二高等学校長に任命された中川元が、熊本を離れたのは、明治三十三年四月二十二日であつた。同日付の日記が、熊本出発ス家内一同ナリ」と記すのが、発令から十日目であるのをみると、転任は予期しない突然の措置であつたらう。・学校職員生徒送ラル其他懇意ノ人ニモ見送ラル途中中田中尚志来ル余田氏ト共ニ徳山迄見送り呉レラル」と日記は続き、翌二十三日付で、山陽線ニテ京都ニ午後七時二十八分着三条通日光屋ニ投ス」と旅程を記すから、熊本―門司間を九州鉄道で旅し、門司―徳山間は汽船を利用したと考えられる。

この時点では、神戸を接点として官設鉄道東海道線、山陽鉄道が連絡していたが、下関へは達していなかつた。^②

京都にたちよつたのは、京都帝国大学、第三高等学校におもむき、

中川 浩 一

関係者にあいさつするのを、ひとつの目的にしていたからであろう。前者では来京中の東京帝国大学総長とともに、大学図書館の參觀をなしている。第三高等学校長は、不在であった。

京都に足をとめた理由のひとつは、私的な内容を伴っている。在熊時代に第五高等学校教授近重直澄に嫁し、夫の京都帝国大学理科大への転任によって居を移していた次女の福と顔を合わせるのが、その狙いであったはずである。

日記は、京都滞在で終わっている。その後、仙台に到るまでの間に、東京で文部省に出頭し、事務打合せをなしたかと思われるのだが、それ以前に浜松で下車し、弟（中川雄之助三男）七郎を訪ねたことは確実である。ちょうどこのとき、中川七郎の家庭では、三男の誕生直後であり、家長（中川雄之助長男）としての中川元は、名付親になるよう依頼され、元三（もとぞう）と命名した。

弟の七郎は、当時、浜松中学校で英語教師を勤めていた。南信（長野県南部）の小藩である飯田藩の藩士の血をひくこの人物は、飯田に中学校が創設されたおり、その初代教員に名を連ね、ついで長崎県平戸の中学校にも籍をおいた由であるのだが、その英語修業経歴は全く不明である。⁵⁾

このようにみえてくると、発令から着任まで、かなりの日数にわたって第二高等学校長は、その職務を実質的には果たしていなかったことになる。そうして、このような経過は、今回のみに限らなかつた。

中川元の第五高等学校校長任命は、明治二十六（一八九三）年一月二十五日であったのだが、熊本着任が翌二月二十一日以降であったことは、『小泉八雲全集』に収められたラフカディオ・ハーンの手紙によっても明らかである。

ところで、第二高等学校長としての中川元が、その公的生活をどの

ように過したかについては、具体的な資料が非常に不足する。第五高等学校長当時については、出張にあたっての行動を刻明に記したメモが残るほか、『龍南会雑誌』が、訓辞、式辞をはじめ、諸行事に際しての学校長の言動を詳細に記録する。

こうした資料の中で、とりわけ参考になるのは、出張に際してのメモであり、その中には、明治三十三年二月の段階で、第五高等学校から文部省派遣留学生を送りだすことに対して、文部次官と打合せをなした事実が含まれている。その該当者が、夏目金之助であったのは、歴史が示すとおりである。

これに対して、第二高等学校長として在任した期間にも、数多くの出張をなしたはずであるのだが、前記のメモにあたる資料は、明治四十一（一九〇八）年四月の分を残すにすぎない。その中で、とくに興味をひくのは、土井林吉（つちい・りんきち）に対する配慮だろう。

今日では、仙台名譽市民土井晚翠（どい・ばんすい）として知られるこの詩人、英文学者は、明治三十（一八九七）年に東京帝国大学を卒業し、明治三十五年には私費でヨーロッパに留学、ロンドンで夏目金之助との交渉もあった。処女詩集『天地有情』（明治三十二年）によって文名すでに高く、『荒城の月』作詞によって人口に膾炙する有名人、名物教授として知られていた。

土井林吉教授の才を高く買ってきた学校長中川元は、専門学務局長以来の交渉を持つ上田萬年東京帝国大学総長に対し、帝国大学文科大への転任交渉を行った。明治四十一年四月十四日付のメモを開いてみると、岡澤鉦治第二高等学校教授に対する配慮要請に続いて、土井林吉教授についての記事が収められている。けれども、結果は、土井氏ノ件モ余リ望ミハナキ方ナラン英文学史ハヨキモ同学中ニ同氏ノ英語学ノ力ノ大ナラザルト發音ノ面白カラサルトノ不評アリ寧ろ案野氏

ニ云々ノ話モアル位ナリ」とする悲観的なものであった。

2

それをなした年月日を、明らかにしえないのだが、明治四十一年から明治四十四年一月までの時点であることは、間違いない。その期間のある日、(仙台)地理歴史会に招待された第二高等学校長としての中川元は、「海洋学の梗概」と題する講演を行った。

このように書いてくると、中川元は自然科学、とりわけ物理学の専攻者かとみたてられるのだが、その経歴をチェックすれば、どこにもその素びりがみあたらない。

飯田藩の藩校で句読(くとう)とよばれる教官の末席に名を連ねたのが、教職生活の始まりだが、飯田藩には洋学の伝統は皆無である。明治三年十一月(一八七〇年)、真進生として大学南校に進学したけれども、フランス語による一般教育を受けたにすぎない。

明治五年八月、明法寮生徒(司法省)に転じたが、同七年五月に依願退学するまで、ここではフランス語による一般教育と法学初歩を学んだだけである。

明治七(一八七四)年六月、東京外国語学校出勤のうえ舎長となり、同年十一月に五等教諭に任じ、フランス語を担当したが、この学校は、語学の教育機関とみるべきだろう。明治十一年一月まで教鞭をとり、ついで文部四等属として、「師範制度取調」の官命をうけて、フランスに派遣されている。

明治十四(一八八一)年一月帰国、以後、文部省官吏を明治二十四(一八九一)年まで勤める中で、視学官、文部大臣秘書官などを歴任するのである。

東京外国語学校在職当時は、倫理学に関心を抱いたことは確かであり、『修身鑑』全七冊と題するほん訳教科書を、東京女子師範学校から明治十一年に刊行する。倫理学に対する関心はその後も持ち続け、文部省官吏時代の取調書類の中にも、この方面での仕事が数多く含まれている。

明治二十四年に高等中学校長に転出後、第二高等学校長として仙台に来るまでの間で、自然科学の研究に精をだした気配も見当たらないのである。そうした人物が、明治四十年代に入って、唐突という表現が適当かと思われる海洋学研究に専念する理由は、いったいどこにあるのだろうか。

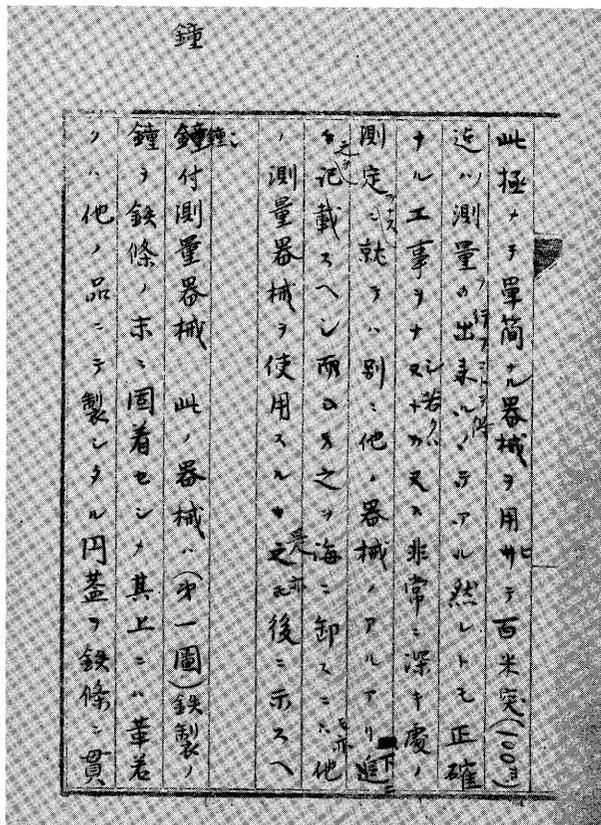
だが、その理由に対する考察は後にまわして、中川元による海洋学研究の経過を追ってみよう。

地理歴史会での講演要旨にも明記されているように、彼の研究が、*“リシャルド氏著のロシアノグラビー”*のほん訳を根底におくものであることは間違いない。校長室にこもって、フランス語の海洋学書はん訳に熱中し、“事務の傍ら砦々之れが功程を進め時には随分退校時間の遅かりし事も有りて事務員等の迷惑を感せしことも多かりき”とは、第五、第二の両高等学校において腹心として仕えた武藤虎太教授(第六代の第二高等学校長)が、『中川元先生記念録』(大正七年)で述懐するところである。

第二高等学校において、中川元が最も信頼した部下であり、校務は一切教頭に委せつきり、校長室では煙草を吹かしてフランス書を読んでいただけであったと、登張信一郎(竹風)教授が回想した^⑧もう一方の当事者としての三好愛吉教頭(第五代の第二高等学校長で、後の皇子傳育官長)は、中川元の海洋学研究を、“晩年には釣魚に格別の趣味を持たれ、海洋学の翻訳なども其から思い付かれたので



◀第二高等学校長 中川元肖像
勲三等瑞宝章を首にかける
から明治35年12月27日から
同43年12月25日までの期間
における撮影である。



中川元自筆による
リシヤール『海洋学』
ほん訳原稿▶

ある^⑨と説明した。よりくわしくこの間の事情を説明した中川謙二郎
仙台高等工業学校長（後の東京女子高等師範学校長）は、元さんは
晩年釣魚に御凝りに成り、御自分の持船で、毎日曜には、必らず塩釜
松島あたりへ釣魚に行かれました。…此釣魚の事から着想されたので
しょうか、元さんは塩釜松島付近の潮流のことを能くお調べに成って
おいででした。代々崎付近などは、潮流が屢変する所で、殊に黒潮な
どの関係も有り、専門家にもまだ研究が届いて居ない点が多かった相
です。そこで此等を実地に就いて質し、学理上からも研究された結果
が、一篇の「海洋学」と云ふ著書と成ったので有ります^⑩と、この間
の事情を説明した。

釣魚の趣味がこうじて、海洋学の研究に転じたとは、武藤虎太も述
べるところであり、先生釣魚の道楽は遂に海洋学に興味を感じられ
仏語の海洋学一部の翻訳を思い立たれ^⑪として、三好愛吉と同じ見方
にたっている。

3

リシヤール『海洋学』の原本は、中川元の死後、その蔵書を関係者
へ分与したおりに遺族の手元を離れたのか、或は未亡人、長男たちが
いく度かの転居にあたって不覚にも忘失したのか、その理由は明らか
でないにしろ、孫としての筆者には伝わらなかった。ただ、僅かにな
ぐさめられるのは、エンピツ書きによるほん訳原稿の一切（図版は欠
除）とその毛筆による下書原稿の一部が、筆者にうけつがれたこと
である。

清書した原稿は、農商務省に提出されたと、武藤虎太は説明し、ま
た筆者の手元にも、そのことをうかがわせる書簡が残っているが、中

川元晩年の労作ともいふべきこの仕事は、ついに陽の目をみなかった。
それがなにもゆえであるかについて考えるためには、明治四十年代にお
けるわが国での海洋学研究の系譜を調べてみる必要があるが、必要であるだ
ろう。

ところで、中川元がリシヤール『海洋学』のほん訳を完成させたの
は、恐らく明治四十三（一九一〇）年であつたらう。その作業の進行
中には、^⑫ 語言は栗野教授、物理は川北氏、地鉞物は中島氏、動植物
は安田氏等質疑の標的と為り時には列座の諸氏も大分弥次り出し談話
に花を咲かしたることも尠からず^⑬ というのが、第二高等学校における
教職員食堂での中食時の情景であり、しかもほん訳が完成したとき
には、^⑭ 是等関係諸子及び予等弥次連をも招き一席の宴を張りシャン
パンの杯を挙げ^⑮たと記述されるからである。翌四十四年一月には、
中川元は、仙台高等工業学校長へ転じていた。

ほん訳されたリシヤール『海洋学』の自序には、千九百七年十一月
十五日（モナコ）海洋学博物館に於て^⑯との記事が入っている。千九
百七年は明治四十年であるのだから、書物としての刊行は、一九〇八
年であるだろう。その刊行に注目のうえ、これを日本にとりよせ、ほ
ん訳、毛筆による推敲原稿、さらに清書という手順を、余人の手をわ
ずらわすことなく進めるには、数年の歳月を要したと考えるのが、至
当だろう。

さて、この時点で、中川元による海洋学研究とは全く別箇に、海洋
学に関心を抱き、著書の刊行に向けて努力していた学者の一人に、理
学博士横山又次郎がある。日本古生物学研究の基礎をきずいたと評さ
れるこの人物は、万延二年（一八六〇年）に生まれ、明治十一（一八
七八）年に東京大学予備門を第一回卒業生として巣立ち、明治十五年
には、東京大学理学部地質学教室を卒業、地質調査所に入って、ナウ

マンの指導をうけた。明治十九年から二十二年まで、ミュンヘン大学に留学した。帰国すると、原田豊吉の跡をついで、帝国大学理科大学教授となり、古生物学の講義を担当し、貝化石の研究を基礎にして、鮮新世以降を対象とする日本の古気候について、画期的な業績を培った。没したのは、昭和十七（一九四二）年である。

こうした経歴を持つ横山又次郎が、早稲田大学出版部から、『海洋学講話』を刊行したのは、明治四十四（一九一）年六月のことであった。三章、あわせて五十節からなり、二四六ページをしめるこの書物は、序文、参考文献の記述を欠いている。また、前記の事情からみて、横山又次郎が海洋学の研究に、特別の関心を抱いていたとは思えない。そのうえ、明治四十年代の当初には、欧米出張を命じられ、会議や視察に忙しい日を送っており、海洋学を独自に研究する余裕はなかったろう。¹³

『海洋学講話』は、ドイツ語あるいは英語による「原書」をほん訳あるいはほん案のうえ、自己の著作と称したものと考えても、恐らく大きなあやまちを犯したことはないならぬと判断される。だがそうだとしても、自然科学に関する基礎教育をうけたわけではない中川元に比べれば、地質学者としての横山又次郎の研究に、数日の長を認めるのが至当である。

では、日本において、海洋学を専門とする学者が育ったのは、いつの時代であったろう。このことを考えるうえでの手がかりとして、宇田道隆『新訂海の探究史』（昭和十八年・河出書房）が、その文中に「日本の海洋研究」と題する学史を収める事実に着目しよう。東京水産大学を定年退官後、東海大学に転じ、海洋学部の発展に尽力して、日本の海洋学研究史に不滅の業績を残すこの学者の経歴を考えれば、前記の書物に記された内容は、恰好の資料といえるはずである。

4

『新訂海の探究史』が説くところによれば、近代科学にのっとる海洋調査を最初に手がけたのは、イギリス海軍に範をとりながら、その事業に着手した日本海軍の水路部であった。沿岸測量にもとづく海図の作成は、潮汐観測と連けいしたのを始め、各種の海洋現象に関する観測成果をつみ重ねていった。

これとは別に、海洋資源の活用と関連して、農商務省水産調査所の活躍があった。また、中史気象台技師和田雄治による海流調査の実績も、忘れられぬ事業であるという。とくに後者は、明治十二（一八七九）年に東京大学理学部物理学科を卒業し、内務省地理局に入ったおり、何もさせられずに本ばかり読まされた¹⁴中に、モーリーの『海洋物理学』があったことが、後に海流調査に多くの成果をあげるきっかけになった由である。

けれどもこうした観測の成果が、集大成されるまでには、長い年月を要したように思われる。大正九（一九二〇）年、農商務省水産講習所技師としての梶山英二が刊行した『日本海洋学』（裳書房）は、そのページをくってみると、日本近海における観測結果にもとづく図表を多数収めているが、『新訂海の探究史』では、海洋研究の普及と促進に貢献したと評してきた。

『新訂海の探究史』が、特筆大書する業績は、寺田寅彦による *Umi no Buturisaku*, 1913（海の物理学 大正二年）である。明治四十二（一九〇九）年、東京帝国大学理科大学助教授に任命され、ドイツ留学を命じられた寺田寅彦は、その年の五月、ベルリンに着き、ベルリン大学に学び、明治四十四年に帰国する。その間、海洋学に少なからぬ関心を払い、また留学以前から手がけた潮汐の二次的振動に関する

の研究結果もふまえた労作が、Umi no Buturigakuの由である。

『新訂海の探究史』は、今日でも斯界の名著として推奨せられておりクリンメルなどの海洋学成書の要点をすっかり擲んだ上、日本の新しい例に基き、独自の解釈批評を加えられており、付録の観測心得などは達人の言として読者の肺腑に徹るものであるとの激賞を、寺田の著作に対してなしている。

『新訂海の探究史』は、横山又次郎『海洋学講話』にも言及して、
“久しくよい参考書として日本の海洋学の進歩の上に少なからず役立った”と言及した。とはいえ、その評価はUmi no Buturigakuに席を譲るものといわざるを得ないだろう。また、そうした判断を是とするならば、中川元が苦心の末、ほん訳をなしたりリシャル『海洋学』は、仮にそれが刊行されたとしても、日本の海洋学発達史を飾る第一級の作品になり得たとは思えない。

自然科学者ではなく、また塩釜や松島で、魚釣りのかたわら、海洋観測を行ったといっても、観測器具を持つわけではなく、また観測結果は、今日なにひとつとして伝っていない。だがそうはいっても、日本近海を対象とする具体的な資料を欠き、「原書」の域をでたとは思われない『海洋学講話』が、長くよい参考書になり得たのなら、中川元による仕事も、刊行の機会をつかみえたのなら、日本の海洋学発達史に、多少の貢献はなし得たであろうにと思われるわけである。

ところで、中川元によるリシャル『海洋学』のほん訳が、日本の海洋学発達史に、少しは役にたちえたのではないかとの言及をなすためには、原本刊行の基盤になった(モノコ)海洋学博物館が、世界の海洋学発達史に果たした役割について、それを明らかにする必要があるだろう。

このことに関連して、筆者は昭和五十七(一九八二)年四月、モナ

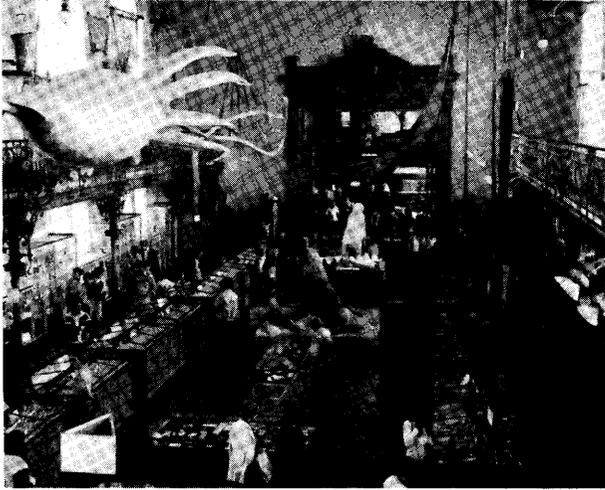
コ公国に位置するMusée Océanographique à Monacoを見学のうえ、若干の資料を入手しているが、それらに加えて『新訂海の探究史』に記された内容も参考にしながら、記述を進めてみよう。

十七章にわかれた『新訂海の探究史』が、その第十三章としてかかげた「地中海の海洋学」の中で、七ページを充当したのは、モナコ公国のアルベルト一世(一八四八―一九二二)による海洋学振興への高い評価であった。まず、地中海に臨む南仏に隣る一小国モナコは海洋学界では甚だ有名な一中心をなしている。それは、この国王アルベルト一世が海洋科学の理解者で、自分自身海洋調査の計画を立てて調査船に乗組んで出かけて行くという研究者であったこと、この国に立派な海洋学博物館があり、研究所が設立せられていたこと、国際水路会議の中心地をなしていることである”と言及し、
“仮令道楽にしても世界文化に非常に貢献したところの立派な仕事を遺した。カジノの灯の下で遊樂に耽り賭博に興ずる人々もこのようにして集った費用の一部がかくの如き文化の華を咲かしたことを思えば多少の感慨なきを得ざるものがある”と、浮世の皮肉をも語っている。

5

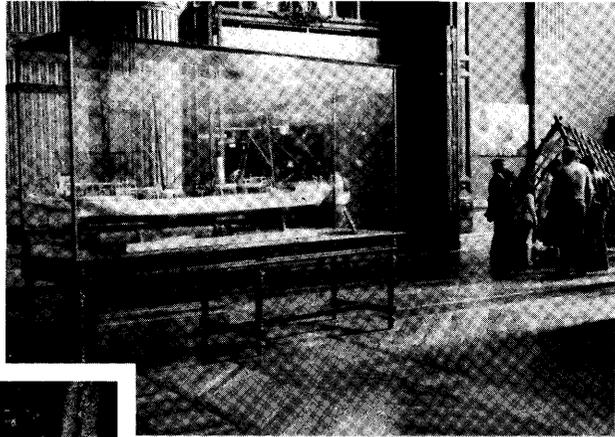
一八八五年、約二百トンの帆船リロンデーユ L'Hirondelle を用いての海洋観測に始まり、一八九一年にはそれがより大型の帆船アリス女王 Princesse Alice となり、さらに一八九八年になると、アリス女王二世 Princesse Alice II (一四二〇トン)と名付けた汽船建造へと発展した。

アリス女王二世号の航跡は、メキシコ湾海流を追って、アゾレス諸島海域からスバルバル(スピッツベルゲン)に及び、北大西洋の海



◀ ① モナコ海洋博物館内部
（昭和57年4月撮影）

▶ ② モナコ海洋博物館内部
（昭和57年4月撮影）
船舶模型は1911年建造の「イロन्दール2世」号



◀ ③ モナコ海洋博物館の庭園にたつ
アルベルト1世銅像（昭和57
年4月撮影）

洋学を徹底的に究明した。この間、世界的な海洋学者のいく人かが、アルベルト一世と行をとにもするわけだが、リシヤール博士 J. Richard も、その一人であったと、『新訂海の探究史』は述べている。

ひるがえって、中川元がほん訳したリシヤールの著書には、自序と題する文の中に、「余ハ公ガ二十有余年間ノ作業ニ参与シ毎年施行スル學術的研究探検二十七回迄出張セルヲ以テ特殊ノ場合ニ於テ海上ニアルニアラサレバ決シテ得ル能ハサル種々ナル観測及ヒ指示ヲ愛ニ記載スルヲ得タルモノナリ」との文を収めている。その言を信用するならば、この書物は、自らの観測記録にもとづく具体的な資料の裏付けを得て刊行された成果であるだろう。

リシヤールは、自分の著書以前に、フランスで刊行された海洋学書について、「トウレー氏ノ千八百九十年発行ノ少シク古色ヲ帯タル（海洋学教科書）及ヒ同氏ノ千九百四年発行ノ（太平洋其法則及ヒ其問題）是ナリ而シテ之ニ加フヘキモノハ、ド・ラバラン氏カ其大著述（地質学教科書）ノ中ニ於テ海洋学ニ資スル一篇ニシテ最近ノ出版ニハ特ニ敷衍シタルモノニアリ」と述べた後、自著はトウレーの著述のように教科書としての目的を有するものではなく、アリス女王二世号の航海による具体的な成果にもとづき、海洋学研究のあるべき姿を、多くの図版を配しながら、具体的に述べるのが狙いであると言及している。

このように見てきた場合、中川元によるほん訳草稿が、提出先である農商務省によって印刷に付される機会を持ち得たならば、なんらかの反応は必ず得られたと考えられる。それがなぜ、稿本のまま、埋れるままになってしまったのかについては、いくつかの事情が考えられよう。

すでに言及した梶山英二『日本海洋学』は、その巻末に海洋学を研究するに当たって参考とすべき書物を、具体的に示している。それら

に目を通すと、いわゆる原書の類は、英語あるいはドイツ語による著述である。またその中には、宇田道隆が、寺田寅彦がマスターしたクリュンメルと言及する O. Krummel: Handbuch der Oceanographie も入っている。

英語、ドイツ語による「原書」がとりあげられるのは、イギリスによる海洋学研究が、一八七二年から七六年にかけて、世界各地の海洋を六万九千哩にもわたって航海し、数多くの成果を収めたチャレンジャー Challenger の探検航海に代表される秀れた業績を背景にもっていること、一方、ドイツにも海洋学研究の秀れた伝統があるのに加えて、明治二十年代以来、親独的な日本人学者が輩出したという事情にもとづくかと思考される。

これとは別に、農商務省に属する水産講習所において、明治四十年のころから海洋学を講じてきたのは、「フランス仕込の海洋学」^⑥をあやつる子爵田中阿歌麿（一八六九―一九四四）であった。明治初期の教育行政家として著名な田中不二麻呂を父とし、明治十七（一八八四）年、父母に従って渡欧のうえ、フランスで人文地理学を学んだおり、湖沼学にも関心を抱き、明治二十八（一八九五）年に帰国してからは、日本における湖沼学の先達として、学究生活を送っている。

こうした経歴、とりわけ湖沼の水温、湖盆の形態に関心を抱いた田中阿歌麿にしてみれば、農商務省を背景とする海洋学は、自分がそれに関与するのが当然といった自負があったろう。

いや、中川元によるリシヤール『海洋学』のほん訳原稿を眼にした農商務省の側で、田中阿歌麿子爵に対する遠慮から、その刊行を非としたのではないかと考えられよう。

中川元自身は、農商務省に提出した稿本が印刷に付されるのを期待し、吉報が得られぬまま、問合せの書簡を送った形跡がある。だがこ

のことに對しては、仲介の勞をとるべく依頼した堀貞から、明治四十四年六月二十九日付での返信があり、稿本は水産局に引渡し、内容を検討中であるけれども、局長は海外出張につき、ただちに今後の措置について知らせることはできないとの断り状がとどいたまま、結局は沙汰やみになってしまっている。

6

中川元による海洋学研究の成果は、仙台地理歴史会における講演の概要が活字になったほかは、全て埋れたままになって、今日に至っている。いや、前記の講演概要とて、それを眼にした人はごく限られており、さらに内容を記憶にとどめた人になると、著しく局限されてしまふだろう。そのうえ、彼の研究動機は、釣魚の趣味が高じてという理解、つまりは閑人の道楽という理解をされてきた。

そのことは、当人が研究の動機を書き残さず、また人にも語らなかつた以上、やむを得ないこともある。しかし、趣味としての釣、リヤール『海洋学』のほん訳という二つの事実を直線的に結びつけ、それを原因、結果と単純に考えてよいのだろうか。

すでに記したように、中川元は、自然科学にかかわる系統的な教育は、なにひとつとして受けてこなかつたと思われる。それであるにもかかわらず、第二高等学校校長当時は、海洋観察以外にも自然への関心をめぐんでいたかの如くである。これも『中川元先生記念録』に武藤虎太が記すところによると、蝶の採集にも力をいれ、さらにそれを標本化のうえ、整理・分類を施し、ついには第二高等学校に皇太子来臨の際、これを献上するまでになった。¹⁷⁾

こと、ここに至ると、蝶の採集も単なる趣味と片付けるわけにはい

かなくなる。皇室に標本を献上となると、国民、皇室の間隔が、今日のそれよりもはるかに画然としていた明治である。よほどの自信がなくては、到底なしうる業でないと考えられる。

中川元が自然現象に対する関心を強く抱くに至った動機は、推測以外にそれを説明する方法がない。またそのことへの途を開くに当たっては、彼の思想偏歴をふりかえり、それらを通して答えを導く以外に方法はないであろう。

ところで、中川元は、飯田藩士であった当時、藩校における下級教官としての句読であった。この当時の藩校は、国学の影響を多分に受ける環境にあった。また中川元の父方の伯父である竹村喬宣は、飯田城下の山本村に居を構える藩内きつての豪農竹村家に養子し、国学に志し、勤王の志に篤かつたという。¹⁸⁾

とはいえ、中川元（当時は孫一郎と名乗る）が、そうした影響を背にして、明治の時代を生きたとは考えにくい。

明治十一（一八七八）年、「師範制度取調」の官命を帯して、フランスの首都パリに生活した当時の中川元は、明らかに民権論者であった。渡仏に際しては、おりから内務省勸農局長の松方正義を、フランス派遣の日本政府万国博覧会代表とする一行に同行を依頼され、会期終了まで、通訳業務を託されると、建白書を介して、民権思想を披露するほどであった。

「法国巴黎万国博覧会派出総裁松方公閣下」と宛名したこの建白書の中で、当時の日本は、「新二政府ヲ設ケ而ル後チ人民生産シ政府ハ生父母ニシテ人民ハ生子ノ如ク恰モ政府アリテ人民生ヲ聊ニスル景況ニ異ナラス」という、いわば権力主導型社会であるけれども、こうした方策では、国家の発展はおぼつかないと、中川元は主張した。

文明開化の実をあげ、富国強兵を達成のうえ、成果を万国博覧会に

誇示する列強諸国のあり方を見きわめれば、“人民アリテ国家興リ国家アリテ政府アリ人民知能ニシテ国家開化ヲ到シ人民力アリテ国力アリ人民憲シテ国憲”する方式で、今日の大をなしたとも、認識するわけである。それ故、政府の職務は、人民の自由な活動を促進させる影の役割に徹するのを良しとすると、中川元は松方正義に対して主張した。藩閥の実力者に対して、これだけのことを臆面もなく主張しえたのは、若気の到りとも解せられるし、また代表団中にフランス語を良く話せる者が少なく、通訳として重用されたがために、簡単には処分されはしまいとの観測もあったが故と考えられる。

ところで、こうした民権説を、中川元は一体どのようなにしてわがものにしているかを、これまでに持ったのであろうか。

飯田藩の句読から、明治新政府のエリート養成機関である大学南校に貢進生として派遣された中川元は、お雇い外国人教師アンリ・ド・リベロール Henri de Reberolles にであっている。大学南校が明治四年十一月（一八七二年）に南校に改組された後も、リベロールをその一人とするお雇い外国人教師による指導（正則）で、普通学を、中川元は学び続けていた。

7

明治五年八月（一八七二年）、中川元は南校を依願退学のうえ、司法省明法寮（学校）に入っている。その動機については、貢進生以来、行を同じくした加太邦憲（かぶと・くにのり）による『自歴譜』が簡潔に説明する。南校での普通学（一般教育）継続に不安を感じ、司法官僚、とりわけ裁判官養成を目的とする専門教育を行う明法寮の開学に、魅力を感じたのだという。

明法寮において、生徒の専門教育をまず担当したのは、“仏国より巴里代言人法学士ブスケー（二十七才）”で、聘に応じて己に来朝した人物であった。とはいえ、生徒たちの普通学は、まだ充分とはいいがたかったために、“司法省は南校において我々の教師の一人なる仏人リブロールを雇い、ブスケーの法律を語る傍ら普通学を教授”させていた。

こうした経過をみると、中川元の民権思想は、リベロールかブスケーによってはぐくまれたのではないかと推測される。

とくにリベロールは、生徒から強く慕われていた。加太邦憲の回想によると、“その人と為り宏量にして懇篤、しかのみならず能く学生の心理を解し、一家の見識を以て教授した人である”とされている。そうして、“学生をして学問に倦まざらしめ、愉快に学問せしめたれば師弟能く和合し、一同敬慕深甚”であったという。

こうした背景があれば、その人格、思想から、生徒のうける影響は甚大であろう。しかし、リベロールがどのような思想の持主であったかを証する資料はなにもない。

民権論とのかかわりを考えるうえで、いまひとり、見落としえない人物は、ロシア人アナキストとしてのエリ・イー・メチニコフ E. I. MECHNIKOB（一八三八―一八八八）の存在であろう。ハリコフの地主を父としたこの人物は、学生運動によって学業を全うしえず、画家を志してイタリア滞在中にイタリア統一の戦いに加わり、さらにはアナキストとして著名なバクーニンとの交渉を介して、第一インターナショナルに参加することになった。

ジュネーブに滞在中、大山弥助（後に巖）と知りあい、また岩倉使節団の副使であった木戸孝允とも交流し、その手づるによって、日本政府のお雇い外国人教師となるわけである。とりわけ大山弥助は、メ

チニコフがロシア帝國政府派遣の秘密警察から、要注意人物とされている事実を承知しながら、日本への渡航斡旋の労を惜しまなかったという。¹⁹

メチニコフは、東京外国語学校に明治七（一八七四）年から勤務するのだが、全く同じ時点で中川元も、東京外国語学校にフランス語担当の正教員として勤務する。東京外国語学校はその規模が小さく、明治七年の状況を記した『東京外国語学校年報』によれば、日本人正教員九名、外国人教員十名にすぎなかった。

こうした中で、フランス語担当の中川元と、担当はロシア語ながらフランス人よりもたくみにフランス語を用いると評されたメチニコフの間に、なんらかの交流があったとしても、一向におかしくない。とはいえ、中川元とメチニコフの間に、直接的な交流があったという証拠は、なにひとつとして見いださずにいる。

ところで、「師範制度取調」を終え、明治十四（一八八一）年に帰国した中川元が、文部省官吏としてなさねばならなかった業務は、地方分権的な教育制度を、国家の手によってきびしく統制する政策推進への具体的な布石であった。しかも、その総仕上げに相当する「小学校令」「師範学校令」制定への具体的な準備が、日々の業務に加っていた。民権論者に対しては、こと志に反する役割が課せられたといふべきだろう。そのうえ、「小学校令」「師範学校令」の公布後は、その実施を促進するための目付役ともいえる文部省視学官になるほどであった。

明治二十四（一八九一）年、第四高等中学校長に就任すると、生徒への訓示に、教育勅語を援用するほどの存在となり、国家主義教育体制の忠実な推進者となったかにみえたのである。²⁰

教育勅語を、教育のよりどころとしてとらえようとする姿勢は、第

五高等中学校長に転じてからも、なお続いていたと思われる。『龍南会雑誌』第拾九號に収められた入学式にあたっての学校長告辞（明治二十六年）は、その典型としてとらえられよう。翌二十七年の入学式告辞においても、諸子の明治二十三年十月三十日を以て煥発せられたる大詔の聖旨を造次顛肺にも遺忘せざりしこと、今更言ふまでもなし、我等は諸子と共に、此聖旨を貫徹実践することを務めて休まずとの言及をなしていた。おりからの日清戦争にあたり、実に国民奉て義勇公に奉ずべき時なり」と、教育勅語の一節を示して説く事例も発見できる。²¹

このように折にふれて教育勅語への言及をなしたにもかかわらず、中川元は、自分が教育勅語を語るに最適の存在とは思っていなかったように判断される。三大節、学校の式日には、教育勅語の奉読を行うのが、旧教育制度下における学校の常であり、第五高等（中）学校においても、その例外ではありえなかった。

けれども、学校長として着任した中川元は、これを修身科担当の教官であった秋月胤永教授（会津藩士出身）にゆだね、自らは列席の教職員生徒とともに、謹聴する側に身をおいていたと、武藤虎太は述べている。²² 師道を重んじ修身科に権威あらしめんとする主旨より出でたることなるべし」とは、そのことにかかわる説明であった。

秋月胤永教授は、当時、英語教師として在籍したラフカディオ・ハーンが、深い尊敬を払っていたほどの人格者として知られていた。

ところで、教育勅語の捧読を修身科の教員にまかせる方式は、やがて維持しえなくなっていた。明治二十八（一八九五）年に秋月胤永が退官してからは、他校と同じく、学校長自らが捧読する方式が、第五高等学校でもとられていく。中川元自身が、そう決断したのか、文部省から、学校長による捧読実施を命じられた結果であるのかについては

は、それをうかがい知る手がかりを、筆者は発見しえないでいる。

こうした事態の変化が、中川元の人生観にどう関連するのか、それを考える直接的な手がかりは、なにも残ってはいない。ただ、第五高等学校長当時、訓辞にあたって、教育勅語に言及して生徒を説諭してきた姿勢を、第二高等学校に転じてからはとらなくなったことは、関係者の証言から明らかである。そのことが、自然現象に対する唐突ともみえる思いいれに、或はつながっているのかもしれない。

注

(1) 『龍南会雑誌』第七拾九號(明治三十三年六月五日)七十一・七十二頁。

第四高等中学校から第五高等中学校への転任は、石をもて追われるような状況であったのだが、第五高等中学校を去るに当たっての教職員を送別は、心の込めたものであった。着任早々、前校長(喜納治五郎)が放任して弛緩の極に達していた規律をひきしめ、在任中は大学豫科三部、工学部の設置に代表される校勢拡充をとりしきったほか、狩野亨吉、田丸卓郎、夏目金之助(漱石)など、後世に名を残す俊才を教授に迎え、教育の実をあげてきた。

中川元の第五高等中学校長着任当時の校内規律は、『小泉八雲全集』第十卷(一九二七年・第一書房)に収められたラフカディオ・ハーンの手簡、『龍南会雑誌』に掲載された学校長訓辞によって、その概況がうかがえる。

(2) 『龍南会雑誌』第七拾九號に掲載された「謹みて中川中学校長を送る」の中には、「吾人一度は其事の余りに唐突なるに駭き、更らに今昔を感懐して、覚えず愁然たりき」との文がある。

第二高等学校長 中川元 中川

(3) 「天は東北―第二高等学校物語」58 河北日報 昭和五十一年十二月三日。

(4) 山陽鉄道が下関に達したのは、明治三十四(一九〇一)年五月二十七日であった。

(5) 中川元三(昭和五十五年四月死去)からの聞きとりによる。中川元三は県立飯田中学校を卒業し、長く下伊那郡下での教員生活を送った後、下伊那郡高森町教育長を公職生活の最後とした。昭和二十年代前半、茨城県教育長として信望を集め、占領軍による人事への干渉をたくみに退けた西野正吉が、飯田中学校在職時代に眼をかけた教え子の一人で、晩年まで師弟の交流を継続している。

(6) 文学博士中村正直、中川元訳述、中島雄校正で版を重ね、高等師範学校に引継かれた後、普及舎から発売されていた。原書は、フランス人テ、アシユ、アシユ、バルロオー編纂「モラル、プラチック」であると、例言に述べている。「修身鑑」の書名は、飯田藩校当時の同僚、親友であった柳田直平(後に柳田國男岳父、大審院判事)の定めたものであるという。(『中川元先生記念録』)。

(7) 『東北新聞』(発行日付未調)に掲載された概要を転記すると次のとおりである。

私は地理歴史に関する専門の知識は持ちませんが、今日御招待に預り何か一つ御土産話とも思い、リシャルド氏の著のラシアノグラビーを読む中、面白いと感じた所を一寸抜訳しましたから、之れを御紹介しようと思います。一体

▲ラシアノグラビー と云ふ言葉を日本語に訳したなら海洋学又は海洋学の博物学とも申すべく、氣象学とも又密接なる関係を有し、経度や緯度或は観測学等をも之に依って研究せられるのであります。今日は只だ海と陸との広袤、地球の両極、陸半球と海半球、地球中の最

高山又は最深海及び海岸線等に就て訳した丈を僅かに御紹介致します。
先づ

▲地球の形 から述べて見ると、或る学者は梨の形として居るが、兩極に於て梨より猶一層扁平であります。夫れは赤道の半径と極の半径とを比べ極の方が二十一キロ米突短いので知ることが出来ることで、クラルク氏の測定に依れば赤道の半径は六三七八二八四米突で、極の半径は六三五六〇七米突であるから其差は二一六七七米突に当り居るのであります。ベッセル氏の測定に依れば又赤道半径は六三七七三九七米突、極の半径は六三五六〇七九米突で其差は二一三一八米突であるが、其平均半径は六三七七キロ米突で恰度、之が南米の北端なるアマゾン河により南端ホルム岬に至る長さに等しいのであります。次に▲地球の比重 と云ふ所を見ると地球の比重は五・五で、其中潮は一、岩石が二より三の間にあるとありますが、▲海陸の面積 は五億一千万キロ米突平方で海の平均面積は三億六千五百万キロ米突なる故之を差引いたる二億四千五百万キロ米突は陸地の面積となる訳なるが、地の面を百とすれば海は二百五十二、又地球全面を百とすれば海は七十一で地は二十九となり、そして海と陸とが一方に偏し居ることは地球図を見れば直ぐ解ることで北半球の陸地は南半球より二割四分の一多く、陸半球の方は海と陸との面積略ぼ等しく海半球は海が陸の八倍半を占めて居る、また▲地球の全海岸 の長さはペンク氏の調査に依れば二六一七〇〇キロ米突にしてクルンメル氏の調査に依ると二五九〇〇〇キロ米突となり居るが、整数にすれば二六〇〇〇〇キロ米突となる訳で、地球の周囲の六倍強に当り、またアンドルハンデー氏の調べに依ると諸威国の海岸線のみで猶ほ二〇〇〇〇キロ米突ある故、全地球の周界線の半分もある訳であります。また海岸線一キロ米突の長の割合にて内部の面積を算

出した表がありますが、夫れに依ると左の通りである。

- | | | |
|-------|------|--------|
| 亜弗利加 | 一四二〇 | キロメートル |
| 亞細亞 | 七六三 | 同 |
| 南米 | 六八九 | 同 |
| 濠州 | 五三四 | 同 |
| 欧全体 | 二八九 | 同 |
| 騰及土 | 八三 | 同 |
| ペロポネー | 二〇 | 同 |
- ▲山嶽 の最も高きはヒマラヤ山系中のイベレスト山で八八四〇米突、之を地球の半径の長さに比ぶれば七二〇分の一で地球を直經一米突の物体とすれば僅かに〇・七メリ米突に当るのみで、▲海の深さ は之まで測量を遂げられたる分にては九〇三六米突で地球の半径の六六〇分の一、地球を直經一米突の物体とすれば〇・七五メリ米突に当るが、最も高きと最も深きを加えて僅かに一・四五メリ米突に過ぬのであるから、私は予て地球を橙と思ひ其皮に表われ居る凹凸を以て山海と知れと教えられたことがありますが、橙では余りに凹凸が過ぎますから玉子のキメ位と見て宣しいと思ひます。
- (8) 「河北新報」昭和五十一年十二月三日の記事に引用された登張信一郎「竹風隨筆」による。なお、戸張信一郎は、その思想が急進的として東京高等師範学校を追われたにもかかわらず、中川元はそれを意に介せず、第二高等学校に迎え入れたと伝えられている。
- (9) 『中川元先生記念録』（大正七年）四三頁。
- (10) 同右 五〇・五一頁。
- (11) 同右 三三頁。
- (12) 同じ時期にミュンヘンで留学生生活を送っていた日本人の一人に森林太郎（鷗外）一等軍医がおり、「獨逸日記」には横山又次郎の消息も

参 考 文 献

記されている。また「うたかたの記」にあらわれる日本人画家巨勢は親友の原田直次郎で、原田豊吉の弟であった。

- (13) この出張にかこつけて、活火山の観察を目的にしてアイスランドに渡航した記録が、「アイスランドに遊ぶ」と題して、『太陽』第十六卷三〇五号（明治四十三年）に収められている。

- (14) 宇田道隆『新訂海の探究史』（昭和十七年）一六八頁。

- (15) 同右 一七七頁。

- (16) 同右 一七六頁。

- (17) 『中川元先生記念録』三四頁。

- (18) 飯田市山本にある竹村家墓地に建つ墓碑には、そのことを記した銘文が刻れている。

- (19) メチニコフ『亡命ロシア人のみた明治維新』（一九八二年・講談社学術文庫）に収められた渡辺雅司氏（同志社大学助教授）の解説文による。

- (20) 明治二十六（一八九三）年十二月十四日、二日前におこった学校前の民家焼失事故で、生徒が消火に尽力したのを賞するために、儀式において、これは教育勅語の主旨に即した立派な行為であり、博愛衆ニ及シ義勇公ニ奉スル行為ノ一端、と言及した旨が、中川元の「日記覚」に記されている。

- (21) 『龍南会雑誌』第貳拾九號（明治二十七年十月）二頁。

- (22) 『中川元先生記念録』三十二頁。

- (23) 明治三十年十月十日開催の第七回記念会は、中川校長先づ立って勅語を捧読せられ、次に校長の祝詞あり、職員総代夏目教授、大学予科総代八波朗吉君……祝詞を朗読し、と『龍南会雑誌』第六拾號（明治三十年十一月）は記している。

第五高等学校開校五十年記念会『五高五十年史』（昭和十四年・第五高等学校）

故塚原嘉藤編『中川元先生記念録』（大正七年・故中川先生頌徳謝恩記念資金会）

高橋佐門「註解・中川元日記」四高・五高・二高時代（『旧制高等学校史研究』第七号・昭和五十一年一月）

中川浩一「中川元小伝」（『旧制高等学校史研究』第七・八・九号 昭和五十一年一・四・七月）

田部隆次『小泉八雲全集』書簡集（一）（昭和二年・第一書房）

宇田道隆『新訂海の探究史』（昭和十七年・河出書房）

宇田道隆『海に生きて——海洋研究者の回想』（昭和四十六年・東海大学出版会）

小野菊雄「エリ・イー・メチニコフへの諸評価」（『九州大学教養部歴史学・

地理学年報』第五号 昭和五十六年）

文部省『文部省二年報』明治七年

中川浩一「明法寮生徒中川元」（『書齋の窓』二四六号・昭和五十年）

加太邦憲『自歴譜』（昭和五十七年・岩波書店）

E. Bonnefous & P. Roy: Institut Océanographique - Fondation Albert Ier Prince de Monaco, Institut Océanographique, Paris.

平凡社『世界大百科事典』（一九五九年）

（茨城大学教育学部社会科）

（一九八二年九月三十日受理）